

# シスター弘田しずえに聞く (一) アジア、中米での体験から

## 編集部

ひろた・しずえ ●一九三八年生まれ。ベリス・メルセス宣教修道女会会員。ボリビア、ニカラグア、メキシコなどで奉仕。国際パックス・クリステイ・カトリック非暴力・カイニシャティブ執行委員、カトリック正義と平和協議会専門委員、私たちの戦争と平和と人権基金理事など。

ベリス・メルセス宣教修道女会の元総長で、アジアをはじめとする各国、そしてローマに長らく滞在され奉仕してこられたシスター弘田しずえ氏に、ご自身のご経験と、そこから見える教会と女性をめぐる問題についてお話を伺いました。第一回は主にアジア、中米でのご経験からです。

### アジア司教協議会の人間開発事務局で

私は八〇年代、フィリピン、マニラにあるアジア司教協議会の人間開発事務局 (Office for Human Development) で働いていました。人間開発事務局とは、アジアの各司教協議会の「カトリック正義と平和協議会」とカリタスの活動を調整し、活性化し、また主に、プロテスタント教会のネットワーク C C A

(Christian Conference of Asia) と社会の問題に対して具体的に取り組む活動を計画し、実施していた組織です。アジア司教協議会とは、そもそも、第二バチカン公会議で、アジアの司教様がローマにいらした時に、欧米の司教たちとはつながりがあったのに、アジアの司教様同士が、お互いに全然知らなかった、つながりがなかったということに気づき、大変驚いたことから設立への動きが始まりました。フィリピンのラバイヤン司教、後に枢機卿になられた韓国キムの金スネン(壽煥)司教、インドネシアのジュリウス司教など、預言者的な素晴らしい司教様たちによって、七〇年代にアジア司教協議会が立ち上げられ、定期的に総会を開催し、「アジアにおけるカトリック教会は、どのような教会であるべきか」という話し合いを重ねました。

生きた対話の実践——まず、現場に赴き、見る

そして、人口の八〇パーセントが貧しい人たちであり、諸文化、諸宗教のアジアにおいて、三つの「対話」を生きたことが、アジアにおけるカトリック教会の生き方、あり方として打ち出されました。1. 貧しい人との生きた対話、2. 諸宗教との生きた対話、3. 諸文化との生きた対話です。生きた対話である、ということが非常に意味があつたと思います。つまり現場に赴き、そこに生きている人たちに出会う大切さです。

人間開発事務局では、B I S A (Bishops' Institute for Social Action)「社会活動司教研究所」という名称の司教様方を対象とする体験学習プログラムをアジアの国々で行っていました。司教様たちが、現実を見、体験して、その体験を分かち合い、現実において、教会がどのように福音を伝えるかを考え、祈り、識別することを目的としていました。

例えば、フィリピンではマルコス大統領時代、アジアの国々の司教様方が、マニラのナボタス(スラム、不法居住地帯)を訪れました。リーダーの家で、司教様方が住民たちと話していると、機動隊が来て、「名前を名乗れ」と言う。武器を突きつけて脅す相手に、参

加者の一人であった白柳(誠二)大司教は「まずあなたが名前を名乗りなさい」と言われ、相手が黙って引き下がったということがあります。

また、韓国では「よその国に行くのではなく、自分の教区の中でいちばん貧しいところに行きなさい」ということになりました。仁川<sup>インチョン</sup>教区の教区長は、メリノール会の米国人の司教様でしたが、自分の司教館からわずか三〇〇メートルのところ非常に貧しい場所があることに、初めて気づいたそうです。プロテスタント信者の家族のところ泊まりましたが、夏で、非常に暑く、お風呂もないところでした。家族が気をつかって、体格の大きな司教様に「司教様、水浴びしてください」ということで、家族は、皆、外に出て、狭い部屋の中で、洗面器から水浴びをされた体験をプロテスタントの家族との出会い、貧しい人の分かち合いの実践の意味として、話されました。

光州<sup>クワンジュ</sup>の司教は、体験学習で現地に行く途中、財布を持っていないことに気がついた。普段は、お供がいるから、お金がなくても困らないわけですが、お供も、財布もなしで、生まれて初めて、貧しさの不安を感じたことを、とても正直に話してくださいました。

バンングラデイシユでは、ムスリムの家庭に泊まった司教に対して、家族の人が、「イスラムの指導者たちは来てくれないのに、カトリックの指導者たちは来てくれた」と大変喜ばれたという話でした。

この話をメキシコでしたところ、アジアの司教たちは、学ぶ姿勢があるのかと大変驚かれました。学ばない人間も組織も、成長せず、未来がないことを確認しておきたいと思います。

### 社会正義活動を、諸宗教で一緒に

一口に諸宗教対話ですが、四つのレベルで考えられるのではないかと思います。まず、日常生活における諸宗教対話があります。例えば、私は自分の家族の中で初めてカトリックになったわけですが、元々は神道で、隣の家は仏教とか、日常生活の関わりにおける諸宗教対話があります。

アジアで非常に有意義なのは、正義と平和の行動における諸宗教対話です。日本のカトリック教会において「正義と平和」は、マイノリティーですよね。みんなに嫌われていたりしますが、仏教でも社会正義の活動をしている人たちはマイノリティーなのです。マイ

ノリティーが、孤立しているのは意味がないから、「一緒にやろうよ」ということで、人権のこととか、貧困のこと、平和、正義に取り組むときはみんなと一緒にする、ということに非常に意味があったし、今では、それが、当たり前になってきているような感じですね。

もう一つは「神体験」、超自然的な体験の分かち合いです。日本では、イエズス会の司祭がカトリック禅を始め、また、押田成人神父様が始められた東西の霊性の分かち合いで、仏教の僧侶がヨーロッパのトラピストの修道院に行ったりとか、そういう意味での対話体験です。もう一つは神学的な対話です。

アジアにおける諸宗教対話や諸文化対話は、今、グローバル化の世界において、福音を生きるために不可欠な「違い」からの学びを準備した歩みではなかったかと感じます。多文化、多言語、多民族、ジェンダーなど、現代世界は、日常的に多様性に向き合い、そこから自分が成長し、変えられる営みを、一人ひとりが受けとめることが、今、イエスに従う私たちに求められていると、心から信じています。

「女性も人間です！」という叫び

一九八六年に日本でアジア司教協議会（FABC）の総会が、東京・上石神井の神学院で開催され、女性についてのワークショップがありました。忘れることのできないのは、インドからいらしたステラ・ファリアという女性の神学者が「女性も人間です！ 女性も人間です！」と叫び続けていたことです。アジアの現実を見れば、女性は人間としての権利がないし、人間としての尊厳も認められていない、という状況が本当に山ほどあるじゃないですか。それで、そういうふうにかんがえていたら、最終声明に「女性も人間です」と書いてあったのです。カトリック教会は、今になって女性が人間だつてわかったのかなあ、と、そういう話もありました。

一つの原点——人間らしいことが珍しい？

私自身は日本ではずっと白百合女子学園にいて、校長始め先生方も、シスターと女性の先生が多く、男の先生は珍しかった。家族も妹と母親、私と女性三名で男性は父親一人だったから、女性差別とかそういうことを、あまり体験したことがありませんでした。

ところが、人間開発事務局で司教とか司祭の間で働いていて、会議があると女は自分一人だったことがよくありました。例えば食事の時に座っていると、誰もそばに座りに来ないのです。そのうちに普通の人間らしい司教さんが、やってきて普通に話す、というような。アジア司教協議会の複数の事務局では、会長が司教、事務局長は司祭、後は信徒、シスターという感じでしたが、聖職者ではない仲間と話している時「あの司教さんはいい人だね」という話になると、どういう人かというところ、普通の人間の人です。普通の人間らしい人がいい人になっちゃ、という（笑）、教会は摩訶不思議なところで、ナザレのイエスこそ、最も人間らしい人なのに、なぜ教会で人間らしく普通であることが珍しくなってしまったのか、本当に変な世界ですよ。私は、このような教会を体験して、これはおかしい、と思い始めました。そこが私の一つの原点だと思えます。

もう一つの原点——やられた方の話を聞く

それと、もう一つ。フィリピンが、日本に占領された四年間は、大変な時で、殺戮と破壊をみんなが体験

しています。従軍慰安婦にされた方も多くいらっしやいました。そこで話を聞いて、痛感したのは、やられた方の話を聞くことの大切さです。これがもう一つの原点です。歴史は勝利してきた者が書いてきたといふけれど、本当にそうです。

一九八六年、アジア司教協議会の総会が、東京で開催された時、私は「正義と平和協議会」にいて、カトリック中央協議会にいたのですが、アジアから司教さん方がいらっしやるのなら、日本は絶対に謝罪しなくてはいけないという思いが、中央協議会からも広がり、白柳大司教の歴史的な謝罪につながりました。謝罪の後、総会参加者の雰囲気が変わったのです。これは、侵略による略奪、人間無視の抑圧に苦しめられた人々の共通した体験だと思えます。

戦時中、カトリックであるフィリピンに、宣撫班として、シスターたちと神父さんたちが、日本から送られました。宣撫班とは旧日本軍が占領地域の住民の協力を得るために、戦争目的を宣伝したり、日本語を教え、娯楽など、民生に役立つことを行うために組織、派遣された小部隊で、フィリピンがカトリック国であったことから、司祭、修道女が、人びとから好意的に

受け入れられることを目的としていました。あるシスターが戦後、戦時中に出会った教え子に会うためにマニラを訪問しました。数人が集まり、当時覚えた、あるいは覚えさせられた日本の歌を歌っていました。シスターが退席されてから、占領下、子どもで歌を歌わされた女性たちが「ホントは怖かったのよね」と漏らしていました。

やられた方から歴史を見るということは、イエスに従う私たちの現実に対する姿勢につながります。社会も、組織も、誰一人残さないことを軸とする包摂的ないのちのつながりとなる営みが、現代における福音の生き方であると信じています。

### 不正なる法律に従わない

フィリピンから一九八四年帰国し、五年間「正義と平和協議会」の事務局にいたのですが、指紋押捺拒否運動が広がり、在日コリアンの方から始まって、カトリックの宣教師の中にも逮捕を恐れず、行動する司祭、修道者が話題になりました。日本の教会において初めて「福音の名において法律に違反する」ことが起こった歴史的な出来事でした。不正なる法律に従うという

ことは不正であり、不正なる法律は守らないのが正義である、ということだと思えます。キリシタン迫害とは、別の意味で、日本の教会では意味があったと思えます。

### 革命後の「神の国」その後の腐敗

ニカラグアでは、一九七九年にサンディニスタ革命があり、サンディニスタ民族解放戦線が勝利し、五〇年にわたる軍事独裁政権が終わり、当時は本当に素晴らしい革命と皆感じていました。私は八九年にニカラグア北部のエルビエホという農村にいたのですが、サンディニスタ革命が、特に貧しい人々にとって、具体的に何を意味していたかを日常的に学べる環境でした。

サンディニスタ政権は、全国識字キャンペーンを組織し、一二パーセントの識字率しかなかったのが、小学校六年生でも、読み書きのできる子ども、若者が国中、山中まで行き、教え、非識字率を一二パーセントに引き下げました。それを取り仕切ったのが当時教育大臣でイエズス会司祭のフェルナンド・カルディナルです。弟のエルネスト・カルディナルは有名な詩人、彫刻家です。フェルナンド自身、山の中まで行き、イ

エズス会の学校に行けるような、いわゆる中流家庭の子どもたちを貧しいところに行かせた、ということとはとても意味があったと思えます。医療の点でも、教会基礎共同体のメンバーを、医療ワーカーとして養成し、ワクチンの接種を徹底して、小児まひを撲滅した業績がありました。エルビエホの教会の女性の言葉が、心に残っています。「サンディニスタ革命が私にしてくれたことで、一番素晴らしいことは、自分の頭で考えるようになったこと、自分の言葉を話せるようになったことです。それが私にとってのサンディニスタ革命です」

そういう意味では素晴らしかったですが、今は本当にひどいことになっています。革命勝利後、司令官ダニエル・オルテガが大統領になった頃は、革命が、本当に神の国の到来だと感じていたメルセス会のシスターたちも多かったのですが、革命が本当に美しいのは非合法の時で、権力を奪取し、権力者になると、権力は人間を腐敗させる。絶対的な権力は、絶対的に腐敗させるのだとつくづく実感しています。

【続く】

二〇二二年一月二五日、東京・高円寺の

メルセス会本部修道院にて取材